Vol.11 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



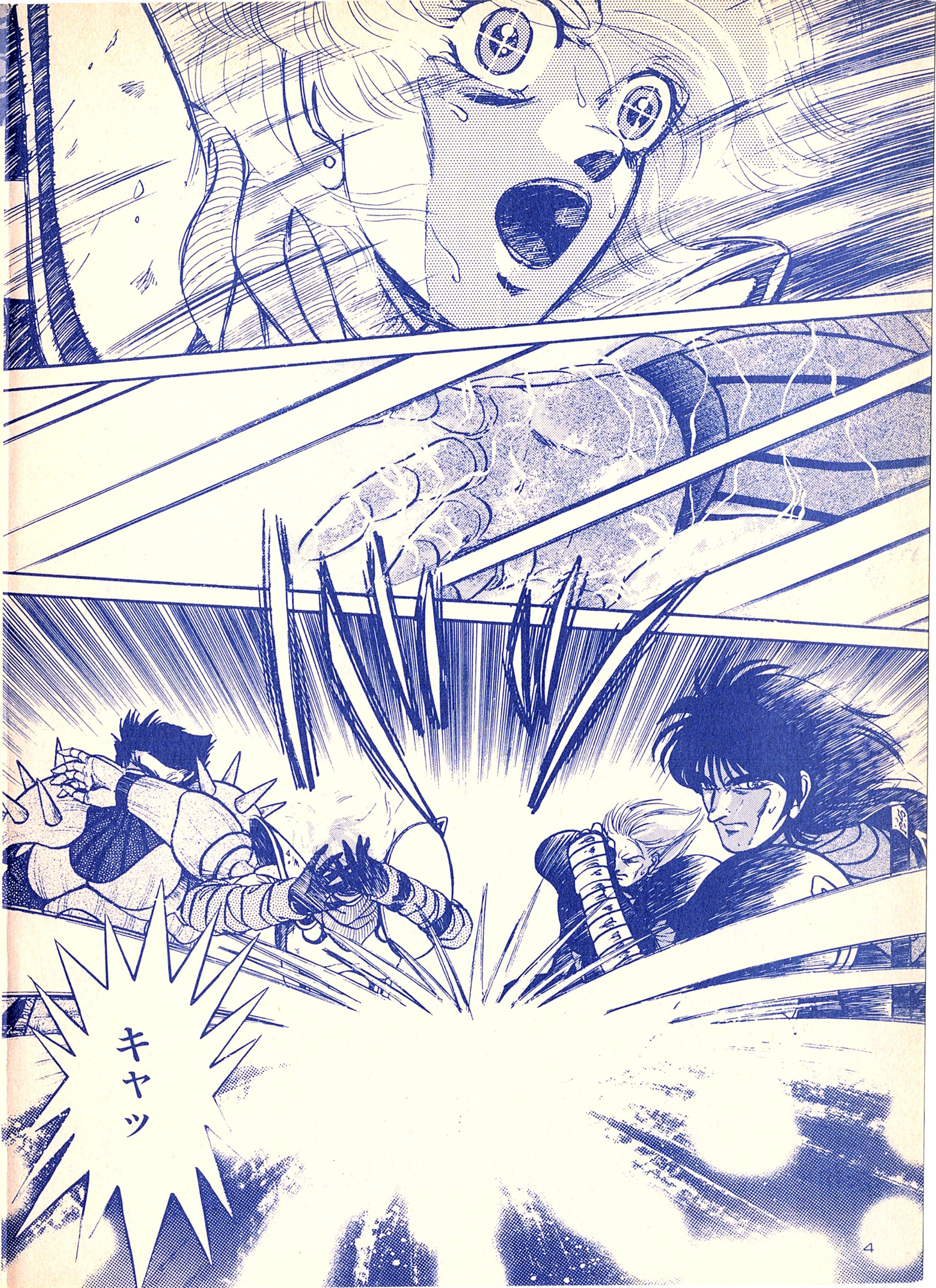
コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

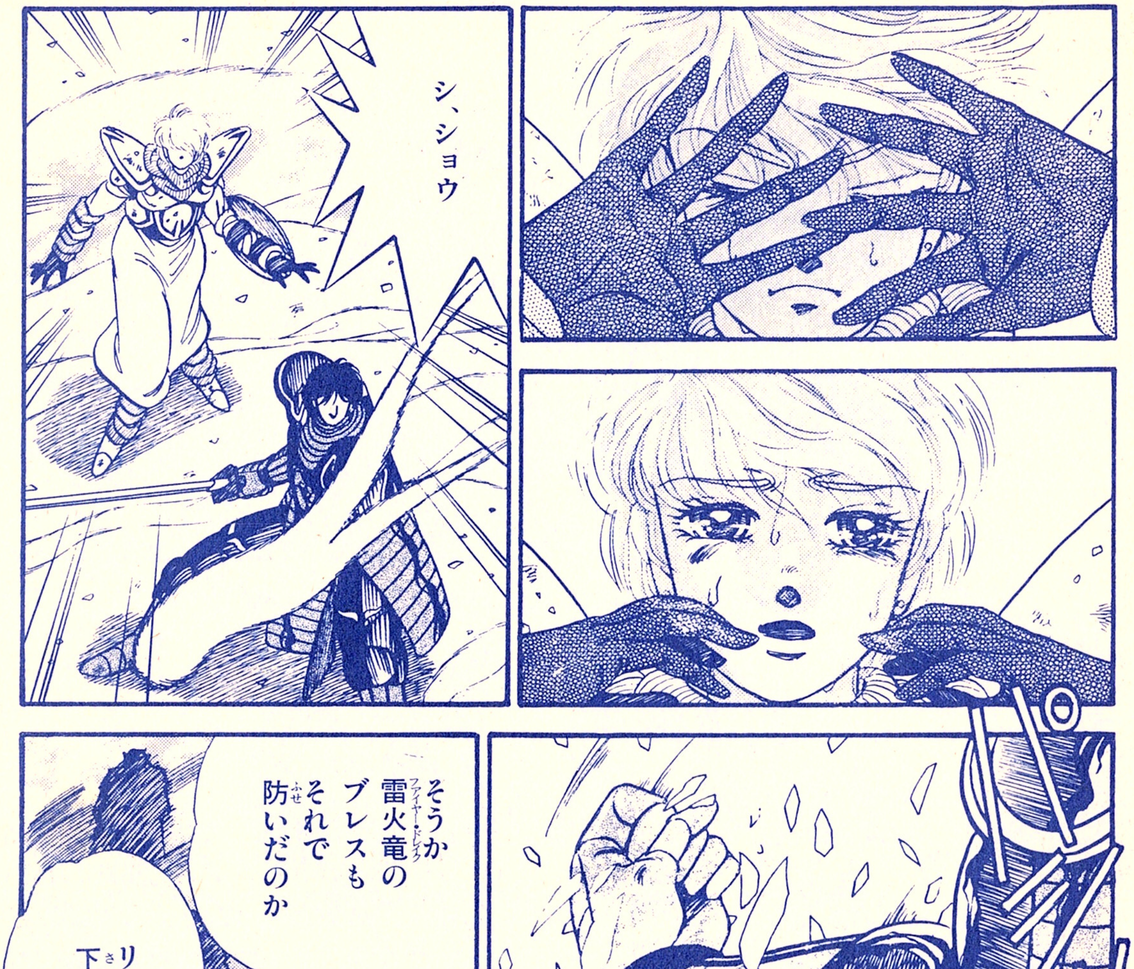
RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!!そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

CONTENTS

FANTASY LAND


Wizardry®
ウィザードリィ外伝 第2部
鳳凰の塔
第7話「払拭」 作/石垣環


キャッ

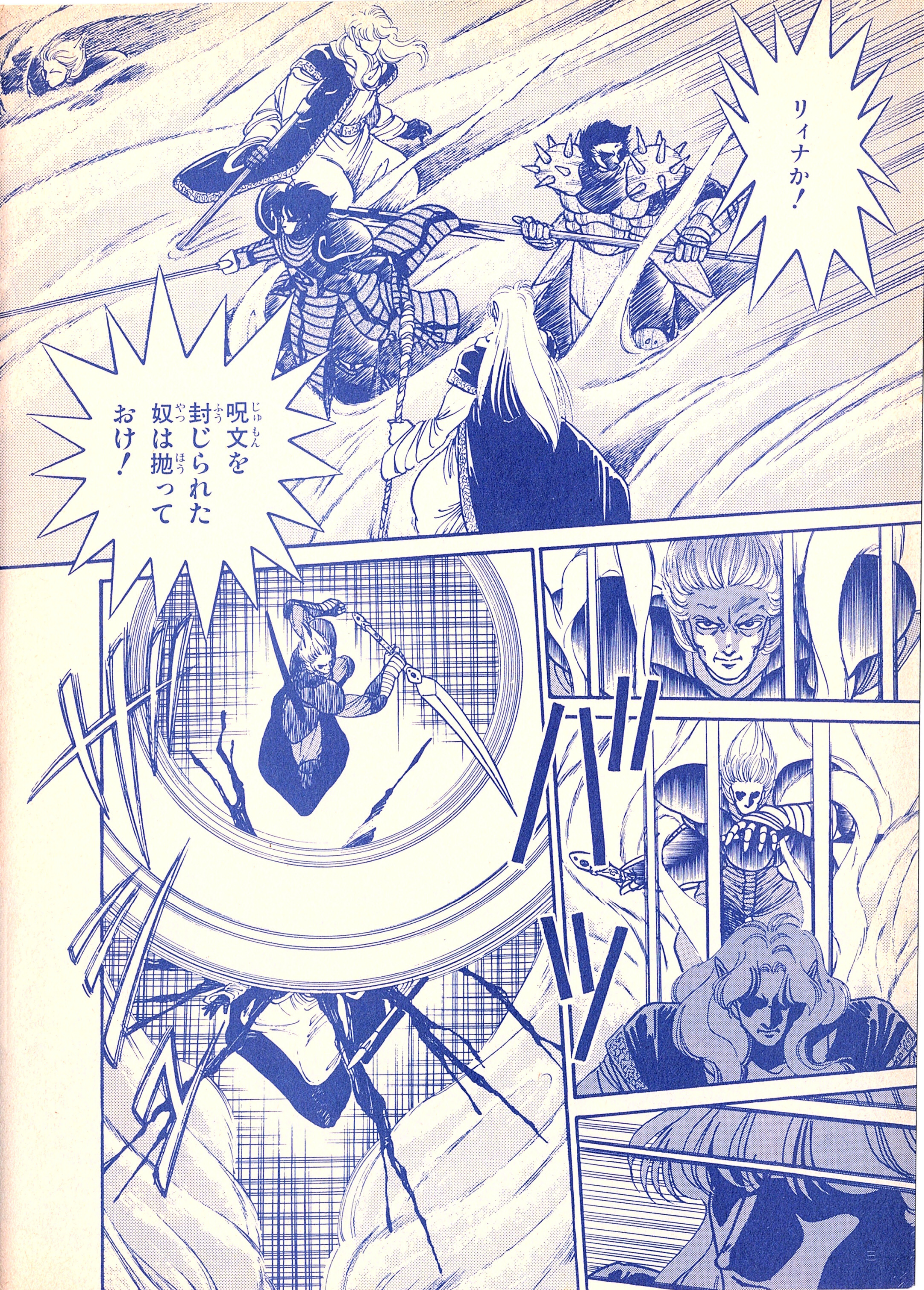


※高位の「ロード」「忍者」「侍」や、「気」の制禦が可能な「侍」にのみ可能な技術。ただし、損傷を皆無にする訳ではない。

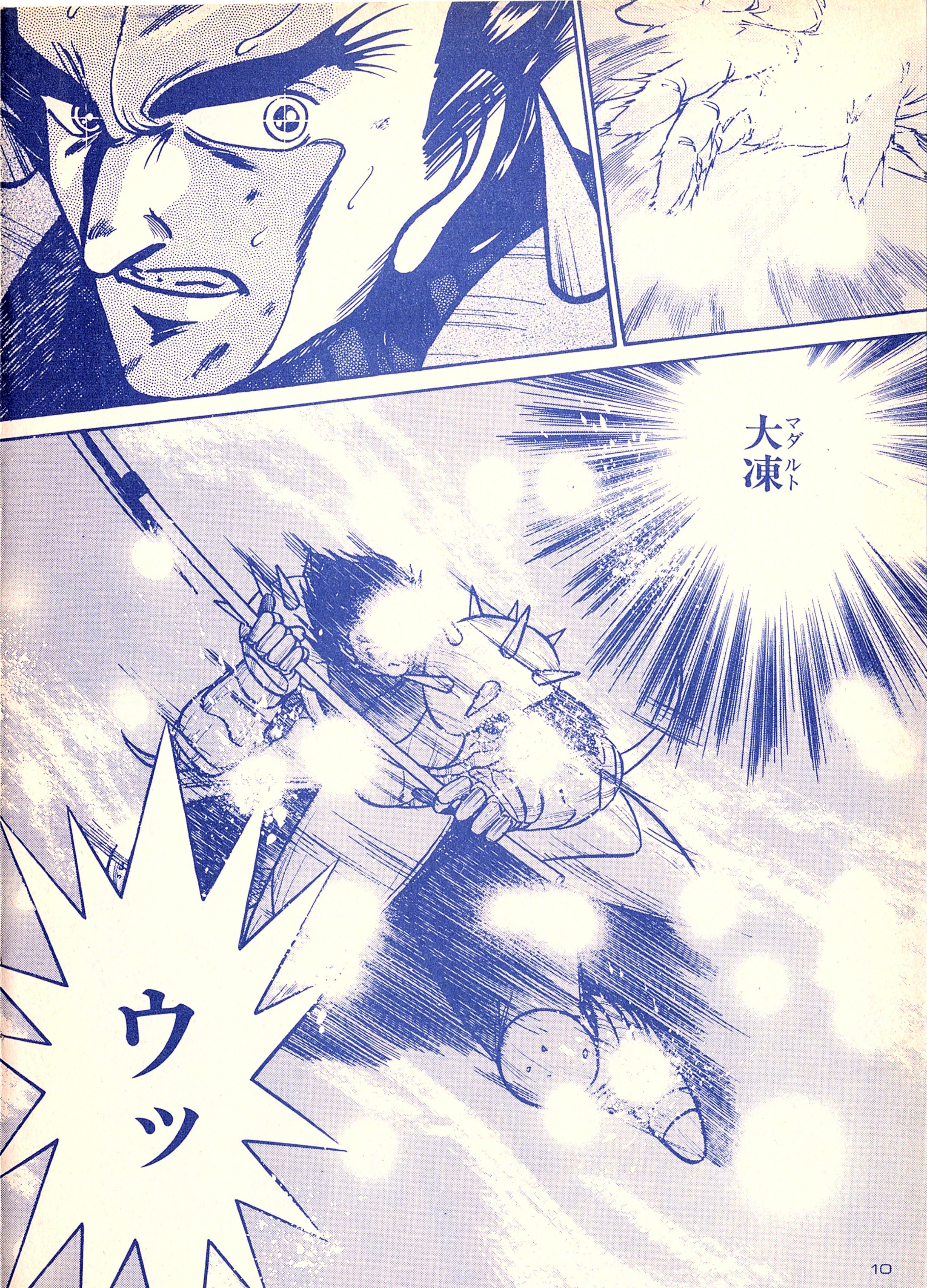

私にも
何か──
「大凍」を
唱えると
なると
厄介だな
──
なあに
詠唱が
終わる前に
斃しゃ
いいんだろ
テツの
云う通りだ
それじゃ
行くぞ！



静寂(モンティノ)！
シュ
シュウッ


リィナか！
呪文を封じられた奴は抛っておけ！


ゴカッッ


大凍(マダルト)
ウッ


チッ
クッ
テツ！

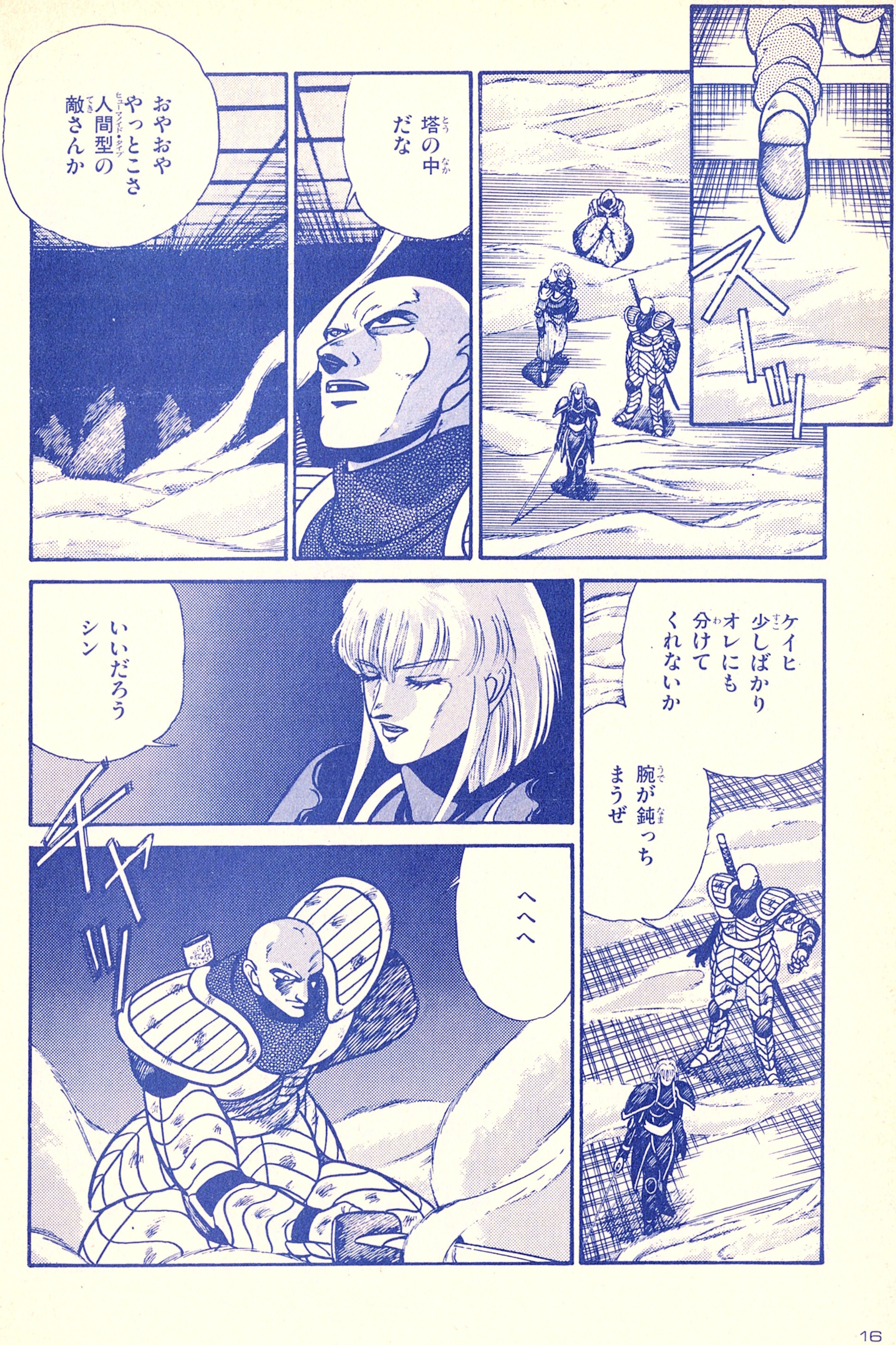

クオオッ

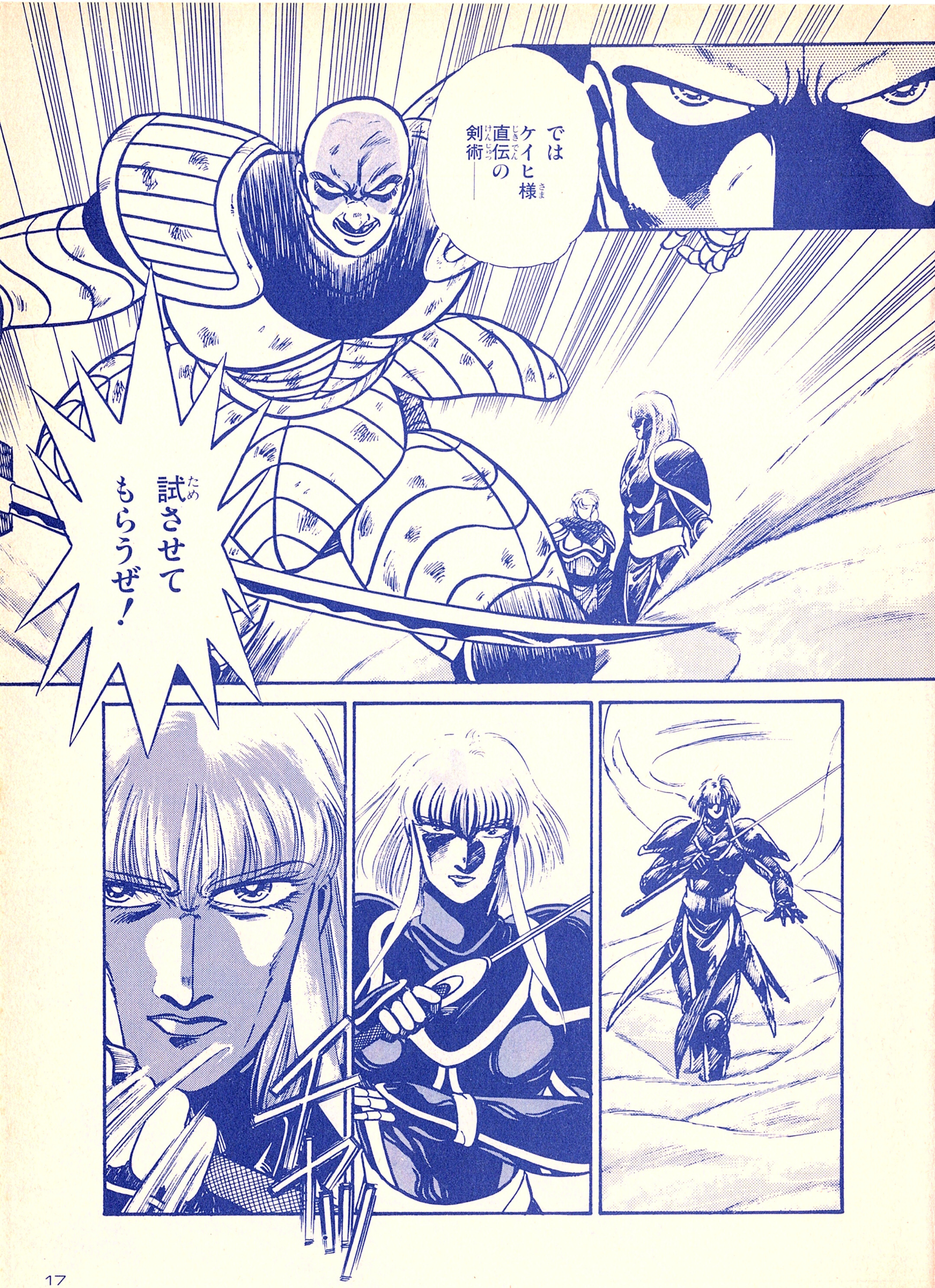

待て!


何(なに)！
消(き)えた
み、見(み)て



なるほど
その階の敵を
斃さない限り
上には行けない
と云うことか
テツ
ゼェッ
ゼェッ
ゼェッ
使えよ
もう
持って
いない
はずだ
しかし
ショウ
大丈夫だよ
行くぞ


スーッ
塔の中だな
おやおや やっとこさ 人間型の 敵さんか
ケイヒ 少しばかり オレにも 分けて くれないか
腕が鈍っち まうぜ
いいだろう シン
チャッ
へへへ



では
ケイヒ様直伝の
剣術――
試させてもらうぜ！

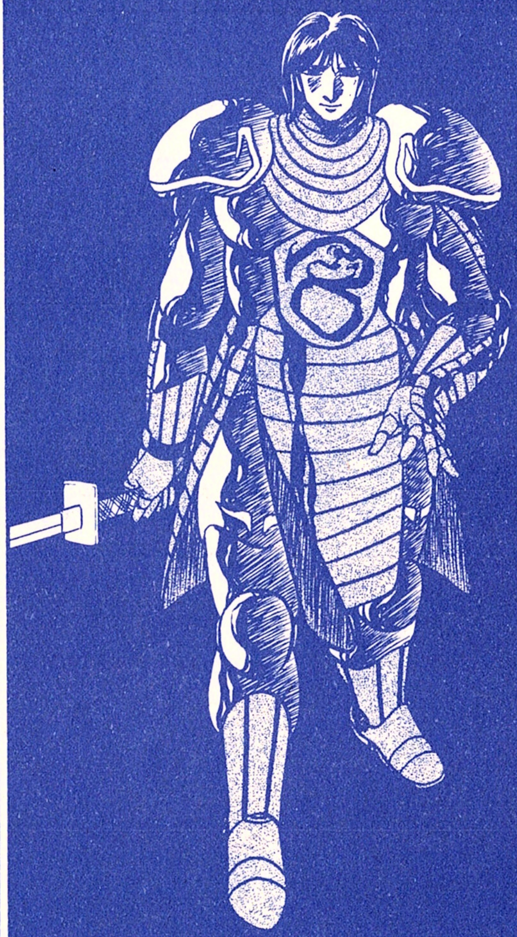



一階よりは楽だったな
僧侶の方が攻撃呪文の数が少ないからな
フウッ
ショウ
疲れてるみたいだけど大丈夫?
ん――ああ……
大丈夫だよ
そ――う
まいったないい勘してる
鳳龍の剣術が広く流布できなかった最大の要因がこれだ――

体力や魔力を
消耗する訳
ではない

しかし
使い手の
限界を
越えた
瞬間消失（ロスト）
する

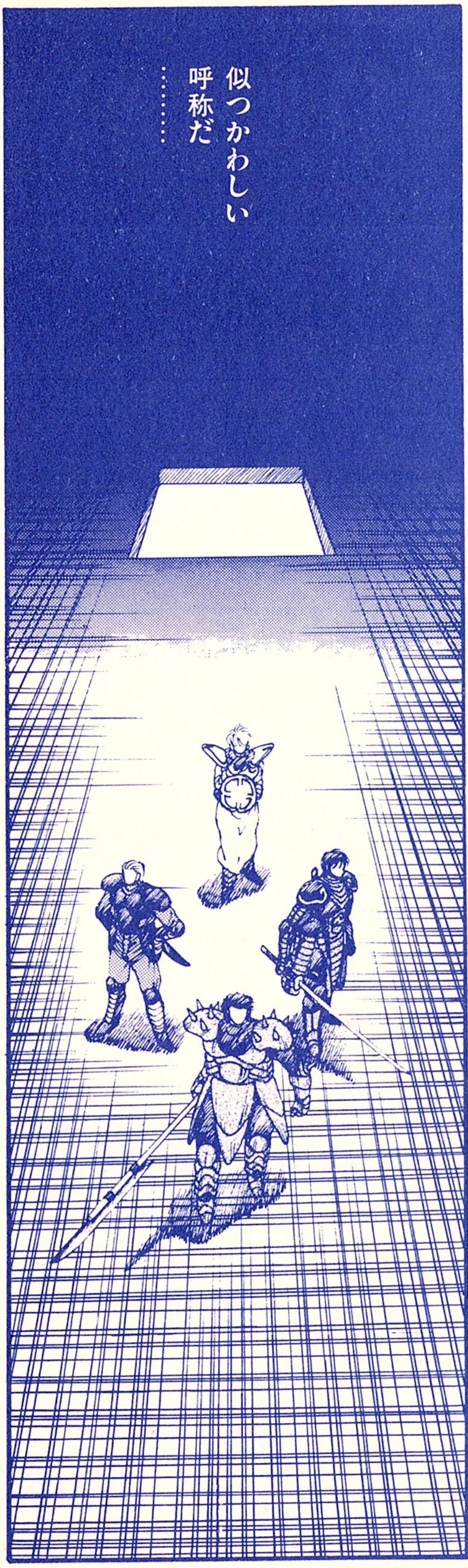
何故ならば



「気」の根源が
生命力と
精神力に
あるからだ

人の生命を
削り採る
剣術（わざ）──

「死」をもたらし
不幸を呼ぶ
剣術とは



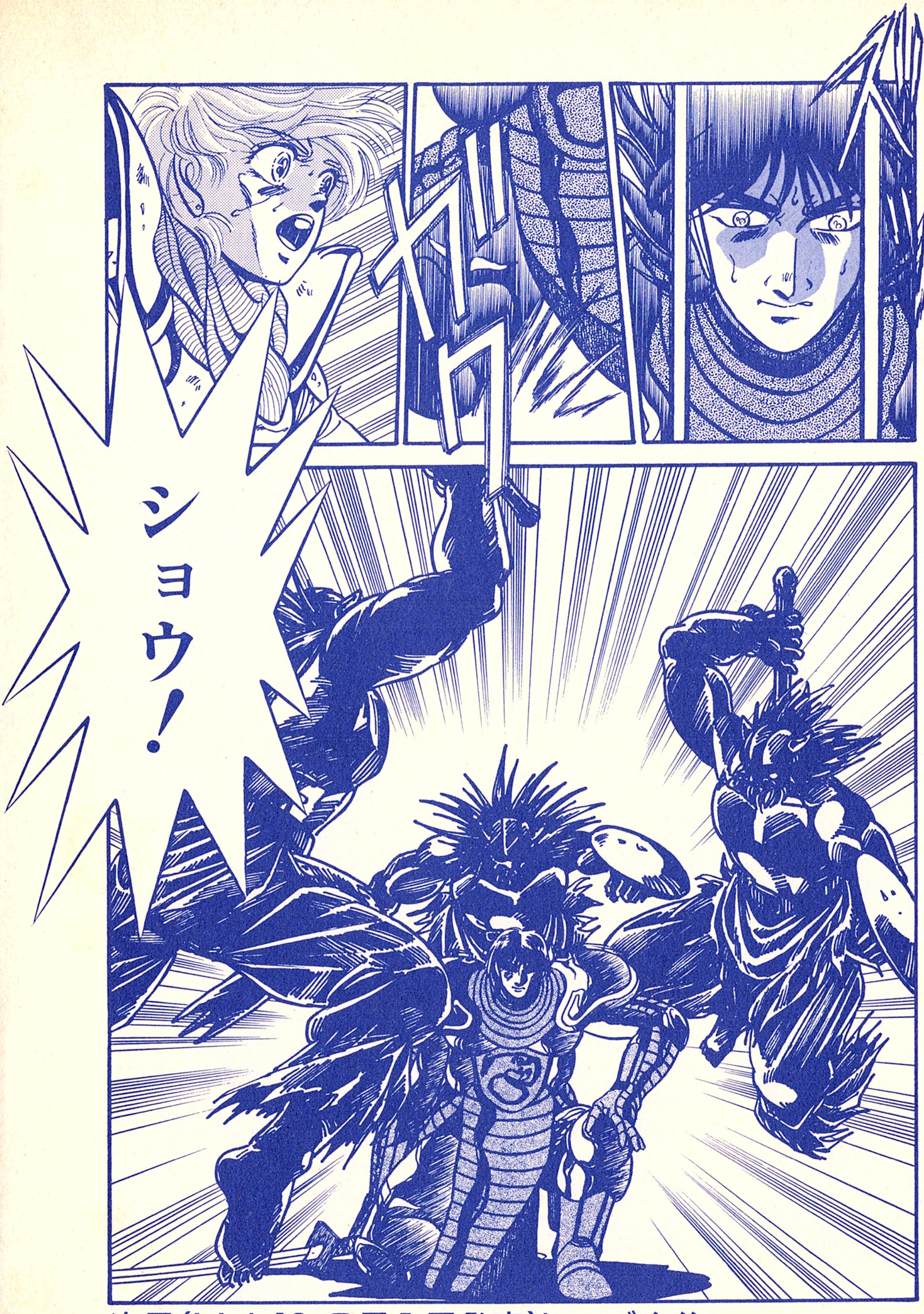

暗いな
――
「恒光」でも唱える?
いい
その分治療呪文が減るからな
このままで構わないさ
ヌッ


テツ！避けろ!!


テッ！
ブルブル
くっ…
ちっ——


囲まれたか
何者かわかるか? サンザ
さあな知らんな
でも呪文は使えそうもないみたい
けど力はスゲェぜ まだ腕が痺れてる
戦い易し斃し難しだな——
………
来るぞ



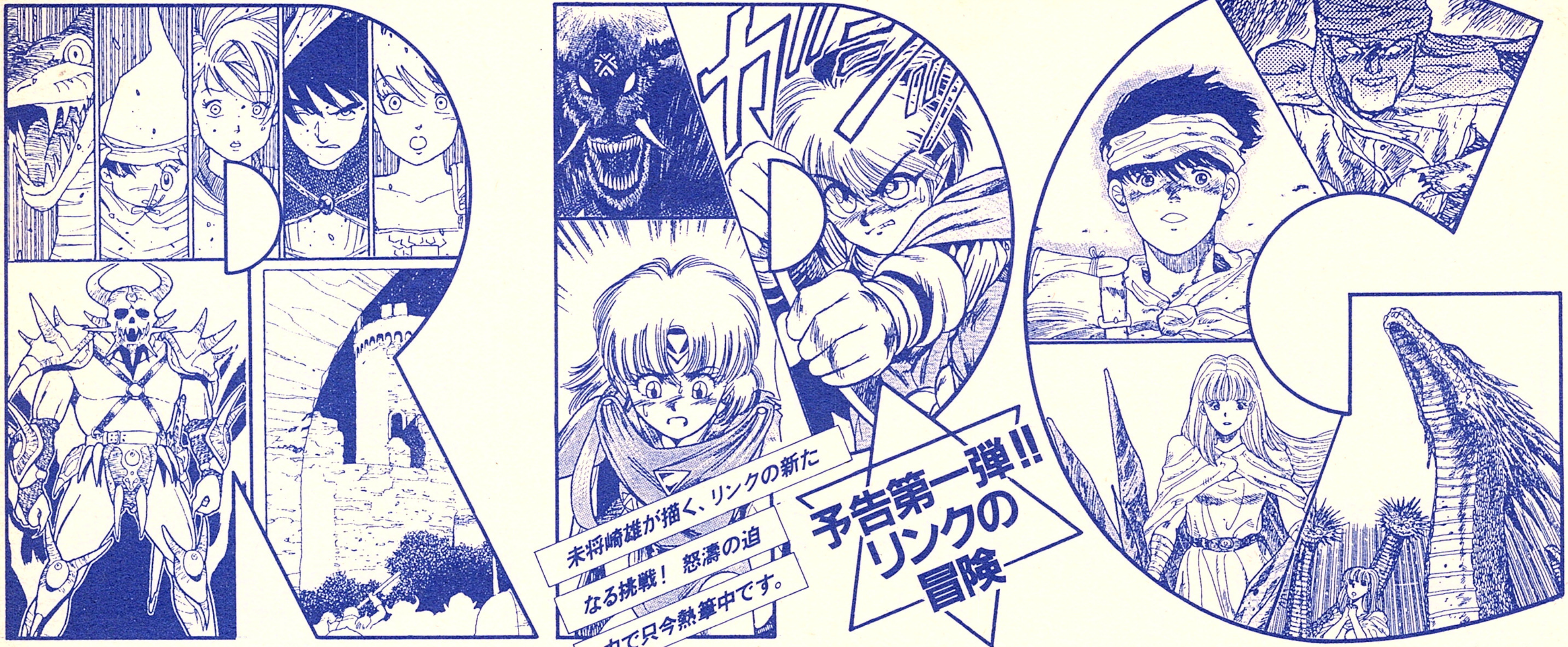


いよいよ第2部のクライマックス!! 次号を待てっ!!

次号（Vol. 12 6月1日発売）につづく!!

名作厳選!!

JICC出版局　書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-234-4621※価格はすべて税込みです。





ファイナルファンタジー

海明寺裕・作
定価900円
世界は今、暗黒に包まれていた。醜怪なモンスターが人々を襲い、風は止み、海は荒れ、大地は腐ってゆく。だが人々は予言を信じた。「この世、暗黒に染まりし時、四人の光の戦士現われん…」



ゼルダの伝説

未将崎雄・作
定価900円
ファミコンＲＰＧのベーシック、その魅力と迫力をコミックで。冒険を重ねパワーアップするリンクと、最終的に待ちうける大魔王ガノンの壮絶バトル！ ロープレのエッセンスを完璧移殖。



最後の竜に捧げる歌

外薗昌也・作
定価900円
生きながら石と化す竜。街を喰らい広がり続ける砂漠。襲いかかる魔獣の群れ。若き勇士アモンと不思議な少女ヴィジルの運命は!? ＲＰＧ新世代のための幻想文学、完全コミック化!!

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎



第七回『重力が衰えるとき』

ジョージ・アレック・エフィンジャー著　ハヤカワSF文庫

近未来のキーワードは易経なのだ！

去年の暮れから今年にかけて、易の仕事をしていた。「あたるも八掛、あたらぬも八掛」で有名なあの易占いの仕事だ。

とはいっても、べつに街角に立って筮竹をふるい、易者をしていたわけではない。ぼくには易者になれるほど、知識や才能はない。

はっきりいってしまえば、易占いソフトの開発のお手伝いをしていたんだ。

ソフトの発売はまだちょっと先なので、残念ながら、あまり詳しく説明できないのがつらいところ。(担当者から釘をさされている)

でも、完成すれば、携帯サイズのものになるから、いつでも、どこでも、易の奥義に触れられるおもしろいものになると思うよ。

正直な話をすれば、この仕事をするまでは、易に対して、あまり興味を持ってなかったんだけど、今では、中国ウン千年の知恵とでもいうべき易の魅力にとりつかれてしまった。

なにしろ、手もとにさいころがひとつあれば、わりと簡単に、占うことができるから、ちょっと「どうしようかな？」なんて悩みはじめたらすぐに、さいころを転がして、掛を出し、解説書で、その掛の説明を読んで「ううむ、なるほど」と一人で納得している。(本当は軽々しく占うものではないらしいんだけど…)

これがまた、恐ろしいほど、よく当たるんだ。最初のうちは掛（占いの結果）なんて、たかが乱数の結果じゃないかと思ってたんだけど、何回かやっているうちに、あまりにも強力な的中率を目のあたりにして、「ううむ、これは宇宙の意志がさいころに力をおよぼしているに相違ない」とまで、大げさに考えもするようになってしまった。

Ｐ・Ｋ・ディックという作家がいる。死んじゃってから、各方面でブームになった人だから、きみもしっているかもしれない。まあ、ＳＦ作家なんだけどね。

彼もこの易に心酔していて、「高い城の男」という作品では、あちこちに、易の原典、易経からの引用が使われていた。きっと、今いちど読み返してみたら、もっと理解できるとは思うけど、根がなまけものなぼくはまだ、読み返していない。

まあ、そこで、比較的新しい作品を紹介しよう。「重力が衰えるとき」だ。この作品には、そのものずばり『易経』電卓というものが登場して、その日の生活の指針を掛としてあたえてくれるんだけど、この『易経』電卓自体が、ディックへのオマージュになっている。

作品そのものは、電脳(！)ハードボイルドＳＦと紹介されている。でも、ハードボイルドなんて渋いことばからくる印象とは違って、読んでみると、どうも、奇妙なユーモアの漂う変な小説としか思えない。

一時期、ＳＦの世界を席巻しまくった「サイバーパンク」小説のなかにこいつも含まれるんだろうけど、ほかの「サイバーパンク」と違い、この小説には書き手の余裕が感じられて、小気味いい仕上がりになっている。

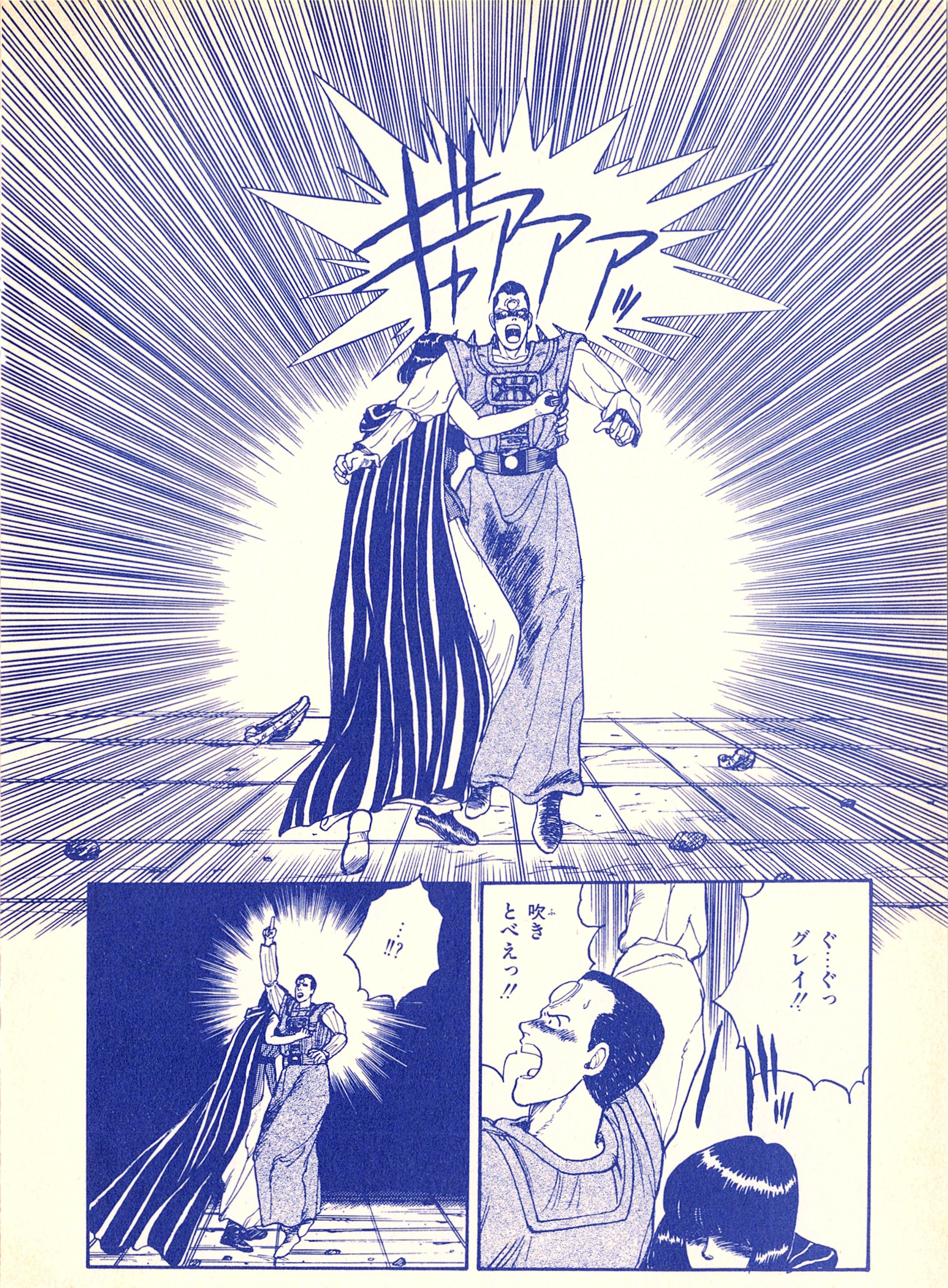
つまりは知性の必要なお笑い小説ってことか。



➡「重力が衰えるとき」ジョージ・アレック・エフィンジャー著、浅倉久志訳 ハヤカワ文庫ＳＦ８３６（６００円）近未来のイスラム世界を舞台に、一匹狼の探偵が、奇妙な事件を捜査するハードボイルドＳＦ。かなり変な小説であることは間違いないけど、妙に読みふけってしまえることは確かだ。

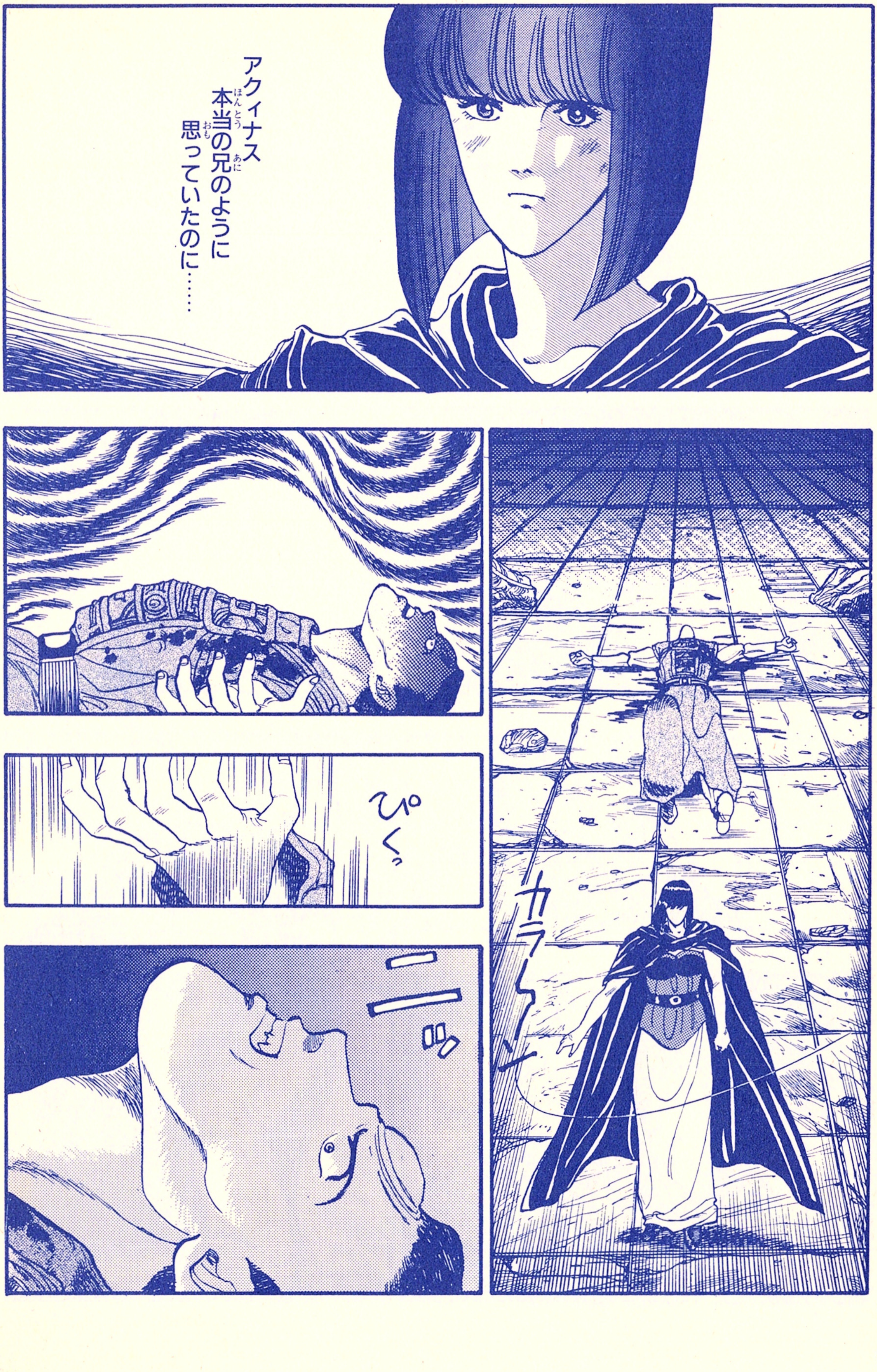


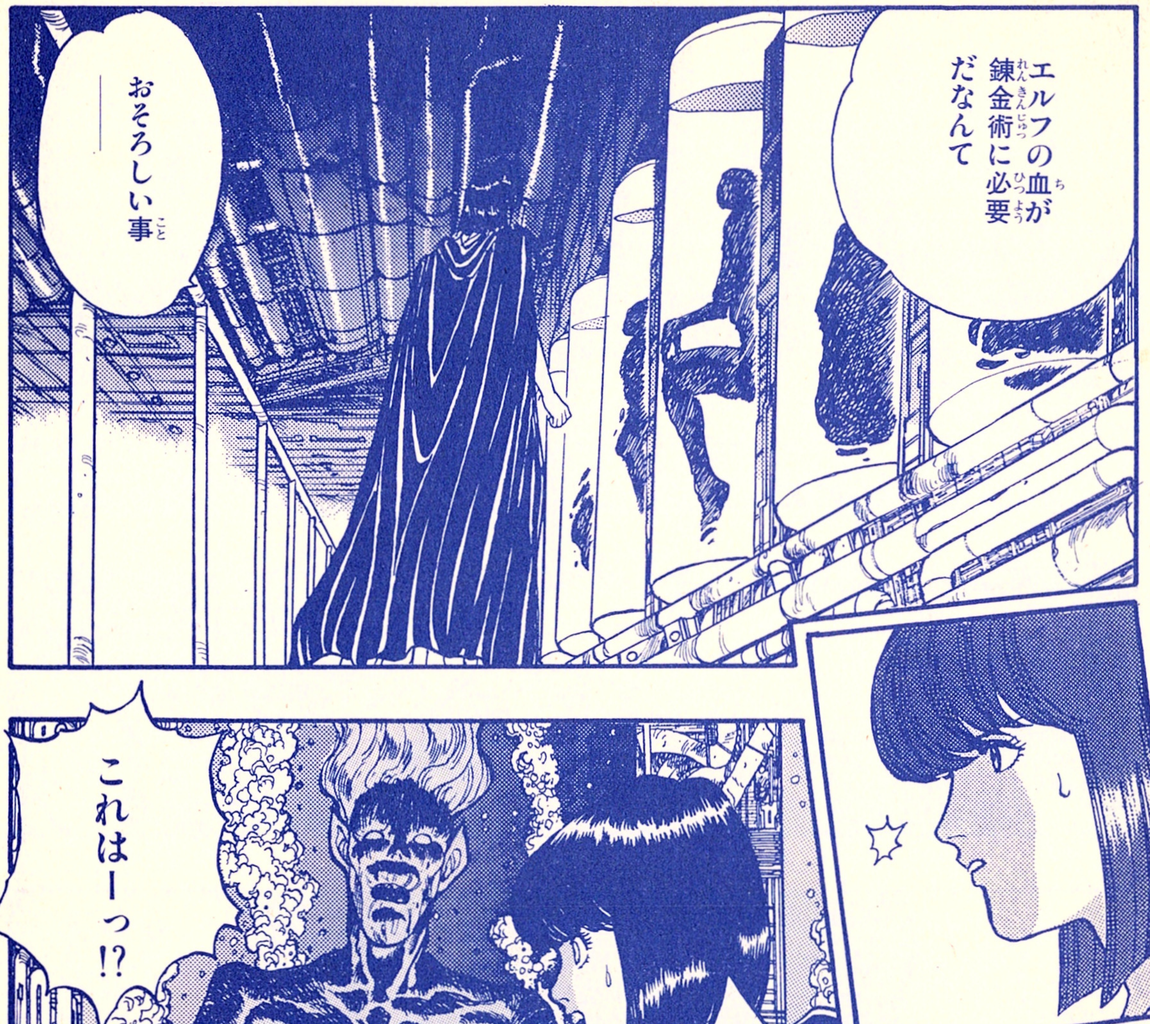
●前回までのあらすじ／すべてを呑みつくす死の砂漠「大喰らい」の謎を解くためかつての師・フレシアを訪ねた女魔女グレイは、師を殺したアクィナスと死闘を繰り広げる。そして精霊を呼び出す錬金術の前にアクィナスは破れるのだが…

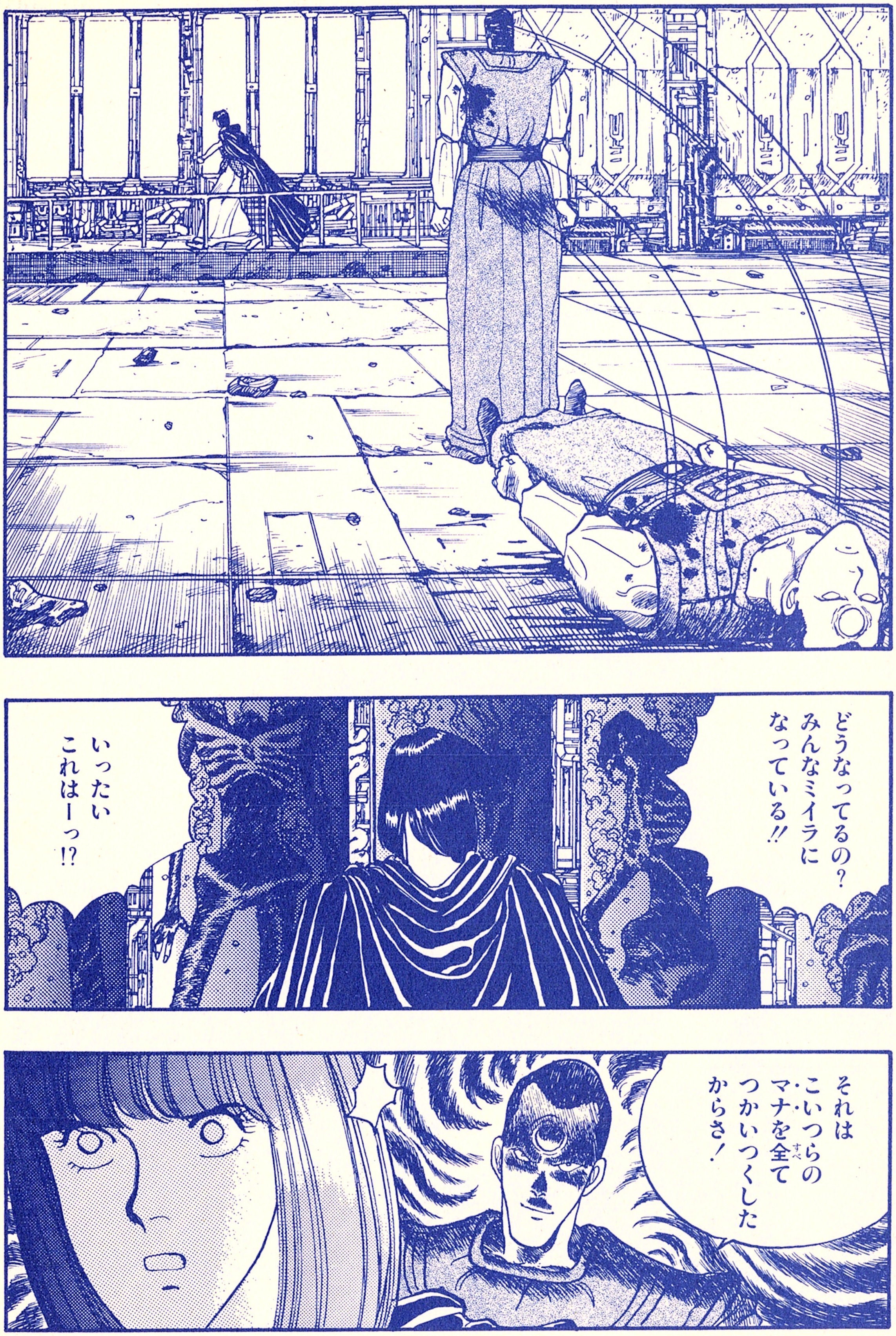

ギャアアアッ
ぐ…ぐっ グレイ!!
吹きとべえっ!!
…!!?


な、なぜだ!?
魔法が効かんっ!!
大魔術の乱発でマナをつかいつくしたのよ!
精霊がくだけなかったでしょう?
彼らはマナが消えたと同時に別の場所へ移動したの!
ヴシュッ
ドッ

アクィナスを倒したグレイ。しかし彼は死んでなかった!!



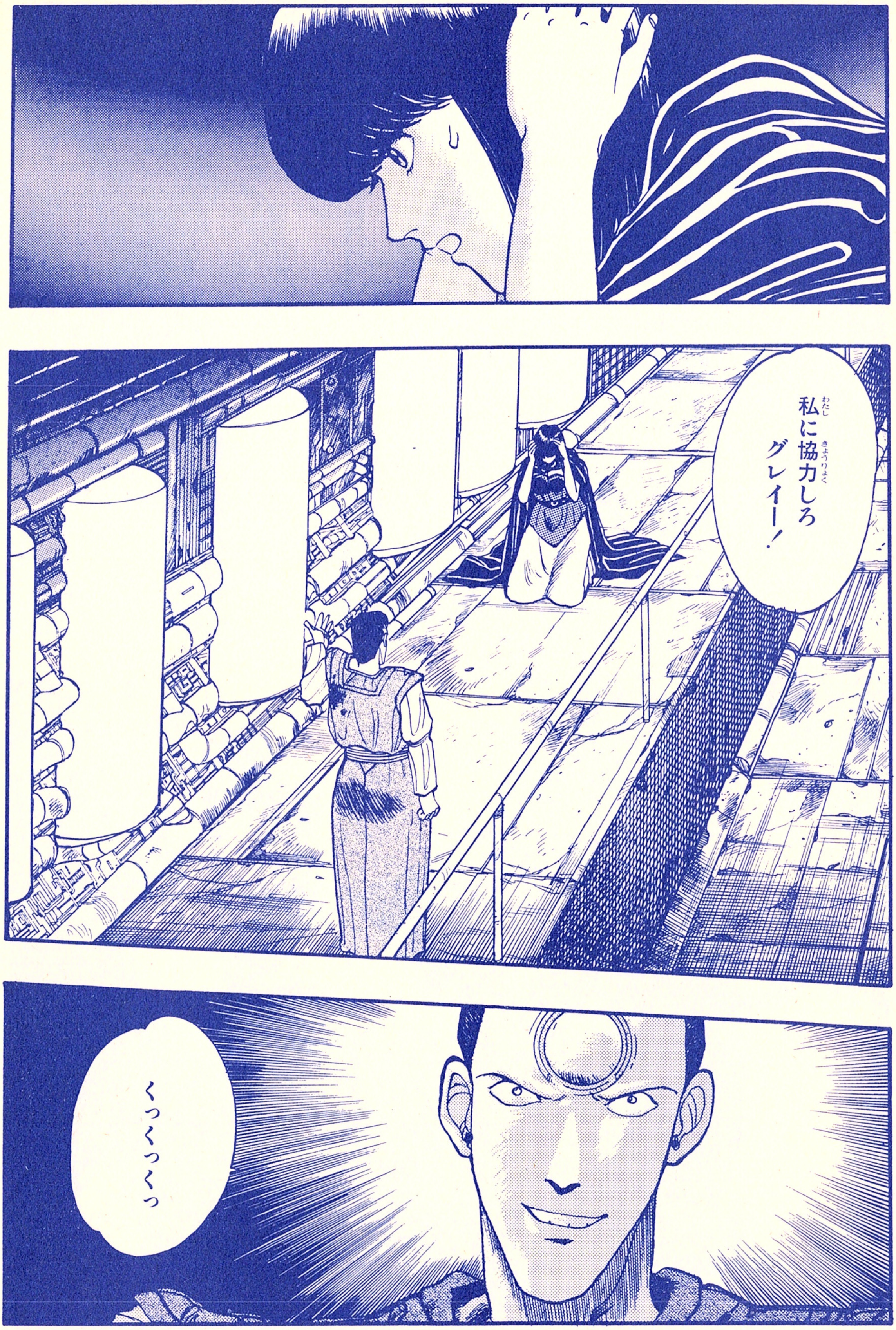

エルフの血が錬金術に必要だなんて
おそろしい事――
これはーっ!?


どうなってるの？みんなミイラになっている!!
いったいこれはーっ!?
それはこいつらのマナを全てつかいつくしたからさ！

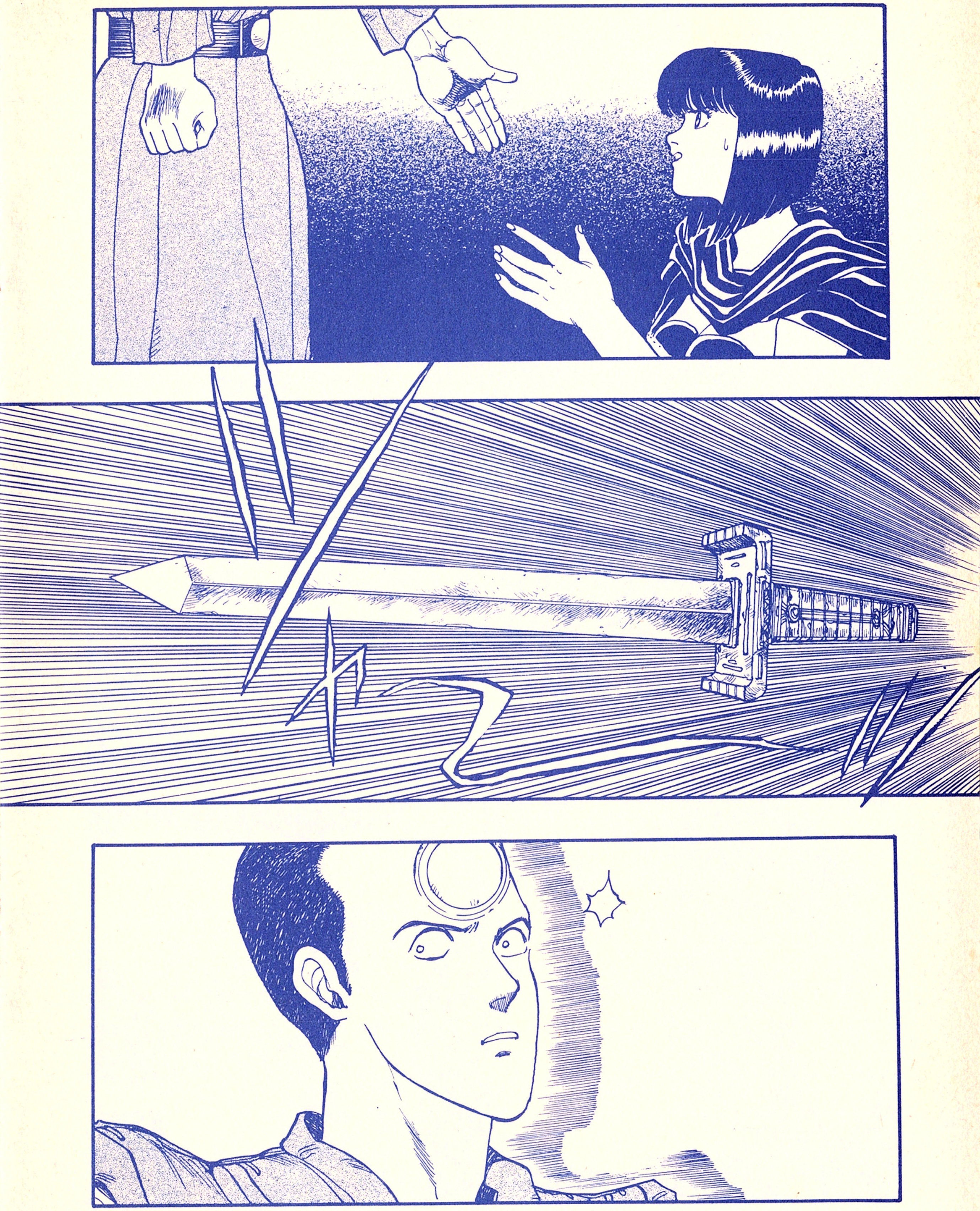

アクィナス!?
まだまだ不完全だが錬金術を使ってこの体は、進化しているんだこの位の傷では死にはせん
今言った事は本当なの?エルフの体にマナがあるというのは!!
あ——あ本当さ　エルフの体は、ほとんどマナ・でできているんだ

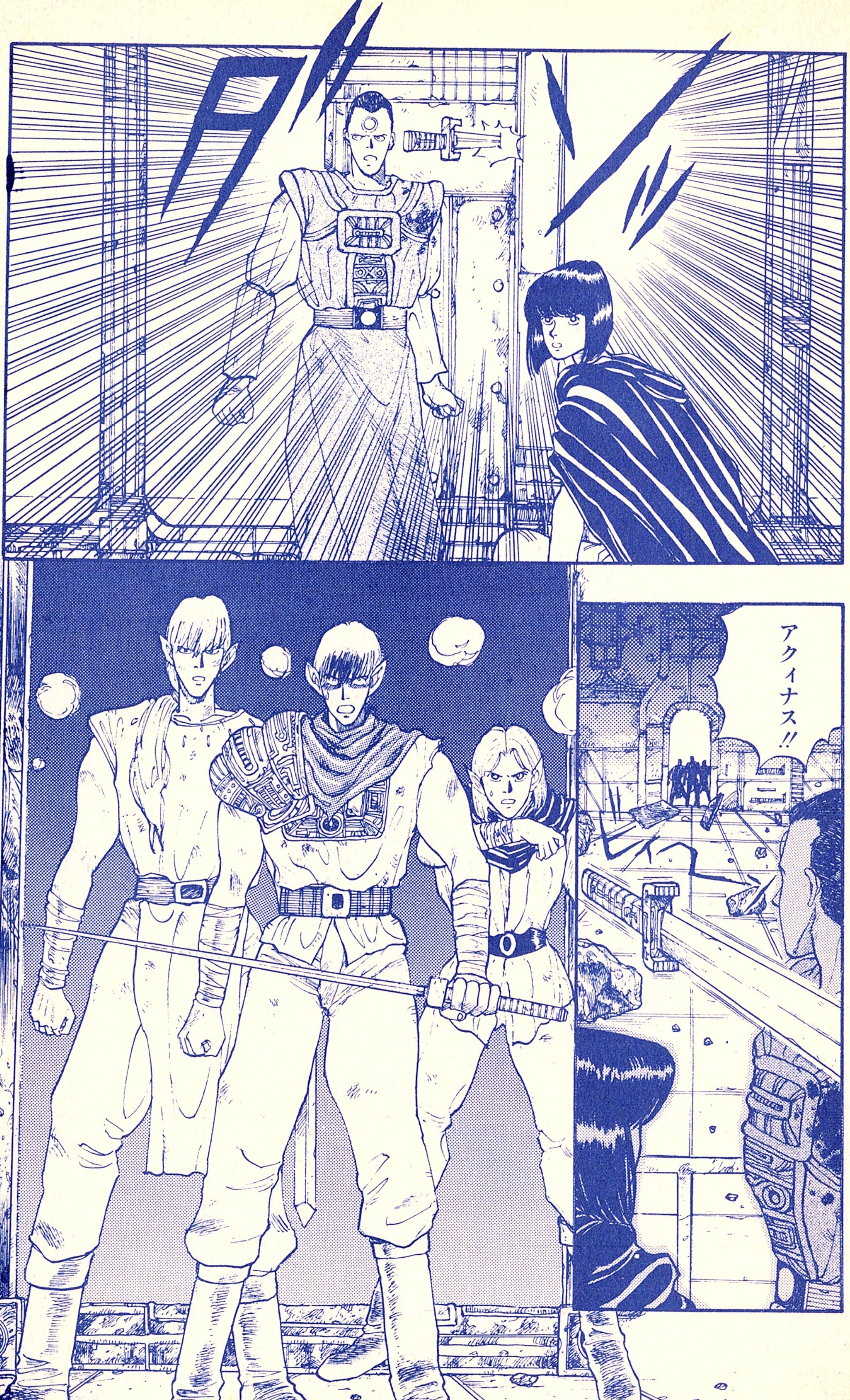

お前 変だと思った事はなかったか? なぜ エルフはわずか3年で成人し200歳まで、若い姿のまま生きられるのか
なぜ エルフは、魔法の修行もなしで、するどい超感覚をもっているのか!
なぜ 瞳が金色な
そして なぜ、ああも魔法をおそれるのか!!
あっ!
知ってるんだよ あいつらは魔法によって体内からマナを吸いとられるのを!!
そ それじゃあっ!!

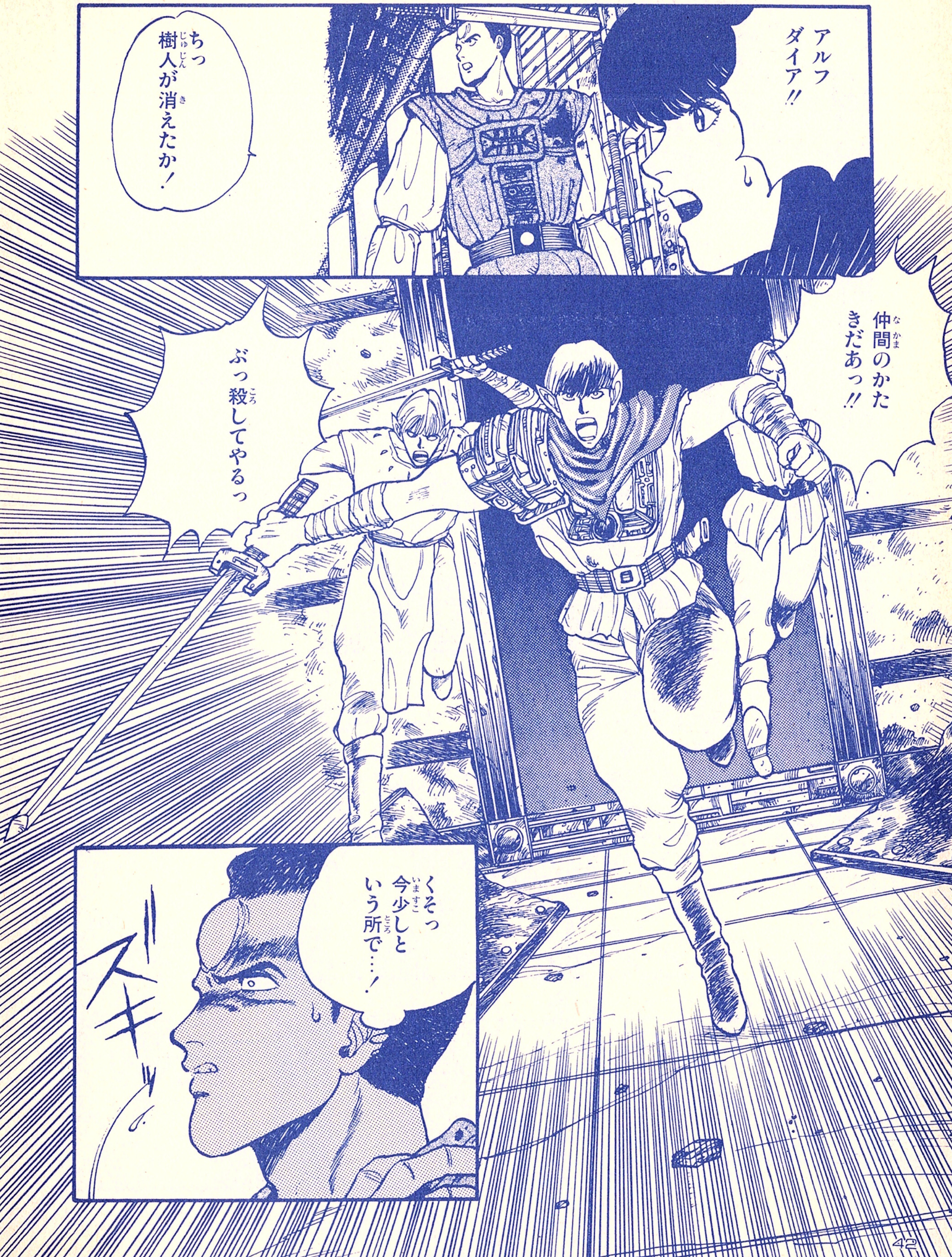

そうだ マナが無くなりゃ 連中はみんな こうなるんだ!!
そ そんなーっ!!
よく考えろ グレイ!!
この地上からマナが無くなれば、お前の好きなシーマもこんな姿になるんだぞ!!


私に協力しろ グレイー！
くっくっくっ

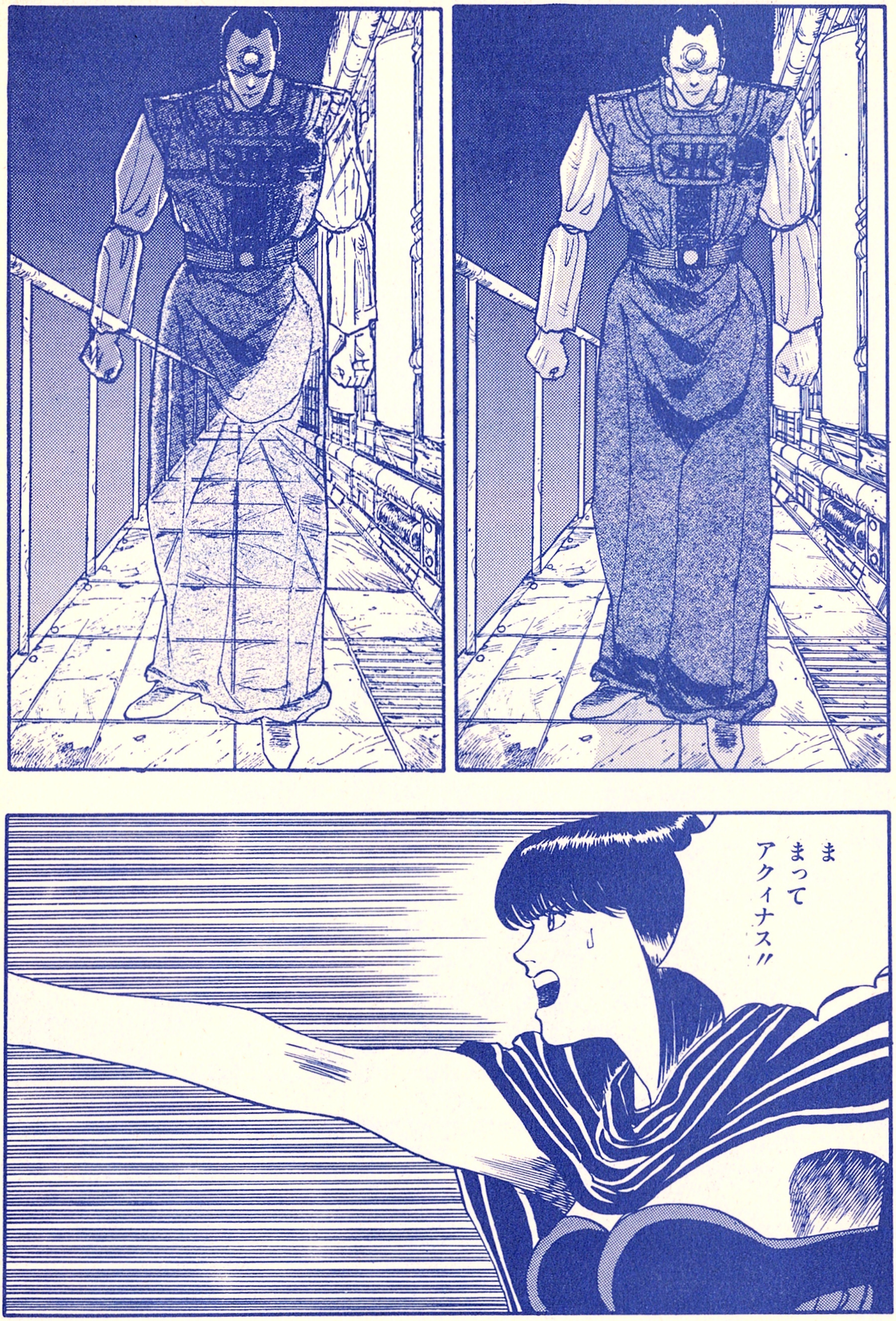

何を悩む事があるんだ
私に協力し神と等しい肉体と魔力を手に入れ大喰らいを止め、魔法を再び栄光の座にひきもどすのだ!
少々の犠牲がなんだ!
それで、何万という人々が幸福になれるのだぞ!
お前もシーマと共に幸福になればよい!
さあ!
神になるのだ!!




ガンッ
アクィナス!!


アルフダイア!!
ちっ樹人が消えたか!
仲間のかたきだあっ!!
ぶっ殺してやるっ
くそっ今少しという所で…!
ズキッ


グレイ
私は真実の都でまっている
えっ
アクィナスっ
真実の都
——!?
よおく考えておくんだな！
……！


ま
まって
アクィナス!!

アクィナスが明かしたエルフの秘密!!　グレイの苦悩は続く……



次号(Vol. 12　6月1日発売)につづく!!

ペンションにたどり着いたてっぽう丸。ひと休みしようとしたが……

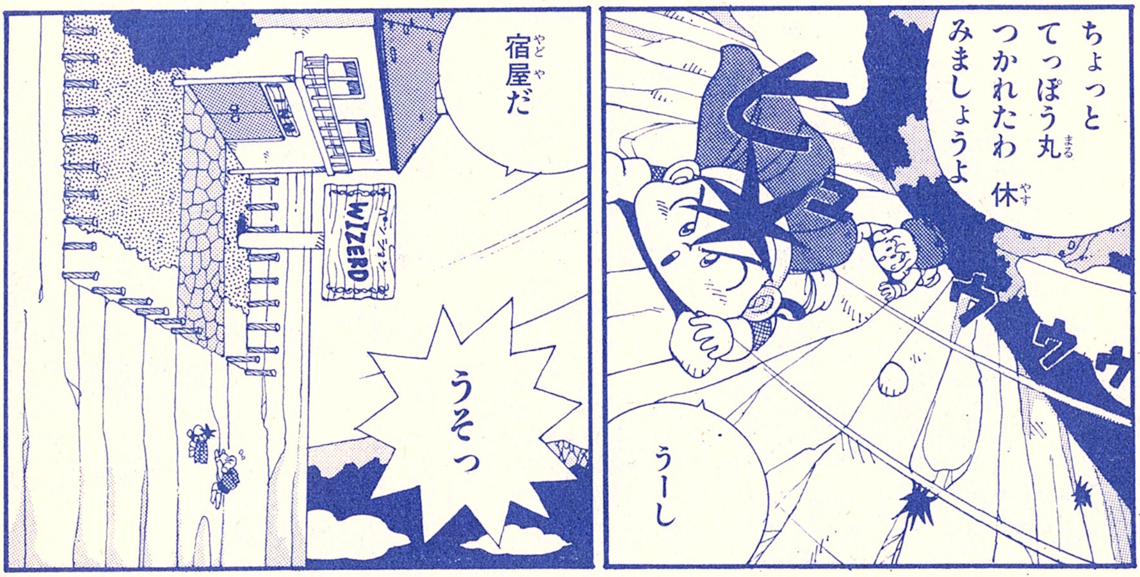
品川KIDの

死んでしまうとは何事じゃ!!

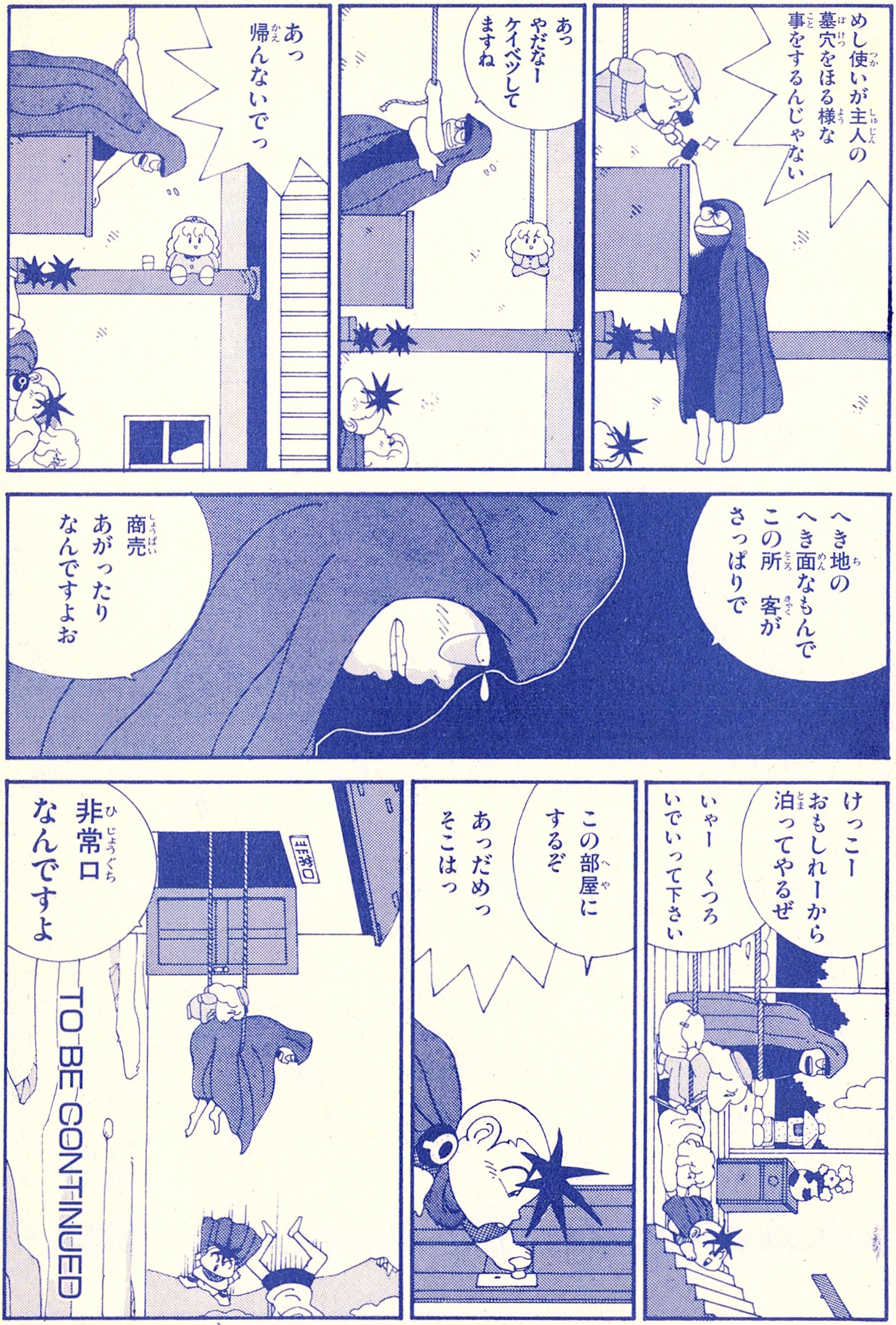


第7回

Presented by 品川KID




WELL COME
はろ はろー
いらっしゃいませ 旅の宿にようこそ
私は主人の魔法使い こいつはめし使い
…
いや
言うにおよばん なぜそうやって壁面に直立できるのかと言いたいのじゃな
それは私の偉大な魔力のなせるわ…
プチッ
ドワーッ
ワワワワーッ



てっぽう丸の旅に休みはない!!

Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第16回

神秘の宝珠が映し出す闇の中
黒煙に包まれて潜む奇怪な物体。
果たしてそれが天変地異を誘発しているのか――。
異変を止める手立てを得ぬまま
"大破壊"の時は迫る！



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十六章〕幻視

エルフの賢者は、五賢者の中で最も年老いていた。

エルフ——太古の神話時代には青年期のまま望む限りの生を送ることができたというこの種族も、いつの頃からかその不老不死の特性は失われ、他の種族と同じく老いて朽ち果てるようになった。少なくともリルガミンの歴史が始まった時代には、エルフの寿命も長くて百年前後となっていたという。

それ故に、かつては自然と調和し、人でありながら超然と生活を営んできたエルフの気質にも変化が訪れた。物欲を拒み、その人生を芸術的なまでに高めようとする精神は薄れ、短い人生の間に刹那の快楽を追い求める傾向が強まってきたのだ。

この時代ではある程度の差こそあれ、種族間の気質にほとんど違いはない。つまり、人類の黎明期には飛び抜けて短命種で、最も野蛮だったとされる俺たち人間族の気質に近くなった訳だ。

しかしエルフ族は伝統的に、あらゆる生命は——たとえ怪物の命であってさえ尊いものであり、それが失われるのは悲嘆すべき事態だと考える者が多い。これは人間族にはない独特の考え方で、長命を誇った時代の名残とも言えるのだろう。もっとも冒険者の中には、ディーを例にとるまでもなくこの手のエルフは見当たらないが。

この賢者はそんなエルフ族の中でも、特に生命を重んじる者の一人だった。

それだけに、異変の原因についての報告を始める際に賢者が見せた悲しげな表情は、俺たちの不安をかきたてるには充分だった。

そして、予感は的中した。

「結論から申し上げます。我々は宝珠に天変地異の原因を答えさせる試みには成功致しました。しかし——」

老エルフは感情を押し殺した声で言った。「しかしながら、わかりませぬ」

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍ル'ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながらも、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを全滅するべく、ディーは爆炎の呪文で宿を焼き払う。ジヴラシアは逃げ出したエレインを屠ったが、同時に石化され、同化されかけたところを謎の男に助けられた。その夜、王宮ではマイノスが持ち帰った神秘の宝珠を用い、異変の原因を報告するための晩餐が開かれたが——。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●ル'ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

「わからない？」

ベイキ女王が即座に問い返した。「どういう意味です。宝珠は答を導き出したのではないのですか」

「宝珠は答を映し出しました。我々が、その像が何を指し示し、何を意味するのかを導き出せぬのです」

数秒間、俺たちはその言葉を頭の中で反芻した。

最初に笑い出したのはディーだった。

「――失礼。でも、おかしな話だわ。宝珠が問いに対して像を結ぶのなら、そこから質問を拡大していくこともできるってことでしょう？　この像が示す原因は何なのか？　どこにあるのか？　だからこそ、全てを映し出す宝珠なんじゃない」

「残念ながらそうではない。確かに宝珠の情報収集の魔力は万能に近い。しかしひとつの物事に関しては連鎖的に答を示すことはなく、問いの本質に対してのみ像が映し出されるのだ」

賢者はディーに対しての言葉を切り、女王を含めた俺たち全員への報告を再開した。

「いかに言葉を変えようとも、求める解答はこの異変の原因に他ならないのです。つまりそれが示すただひとつの映像だけが、我々の知り得る情報の全て、ということになります」

「どうしたら異変の進行を止められるか、というような問いはできないのですか？」

ザザが尋ねた。

「宝珠は現存する事実のみを映すのだ。方法は選択の余地が残された未来に属する。その問いには、答える力をもっておらぬ」

円卓には重苦しい雰囲気が漂い始めていた。

実のところ、俺はこの事態をある程度予測していた。

いや、俺ばかりじゃない。ディーやザザはもちろん、宝珠探索に携わったほとんどの冒険者が胸に抱えていた疑念だった。

神秘の宝珠に託した希望は、この天変地異があまりにも唐突過ぎ、不自然な現象であるという賢者会議の出した見解の上に成り立っている。

高度な占星や精霊召喚を持ってすら原因を解明できないばかりか、絶対の守護を約束する筈のグルニダの杖の魔法障壁をも打ち破った異変の数々――そこには必ずや何らかの意志が働いている、というのが賢者たちの見解だった。そしてその原因が究明できれば、自然現象ではない以上異変を止める方法もある、と。

だが、ただの自然現象だったらどうなる？　害意が存在しないからこそ、杖の防御能力も働かないとしたら？

また、仮に人為的な――人とは限らないが――原因があったとしても、それがどうにも手の出しようがない類のものだったなら、やはり異変による破滅は免れない。

つまり、宝珠を手に入れたところで絶対に助かる保証はなかったということだ。宝珠の探索は天変地異を止める手段ではなく、あくまでその前段階に過ぎないのだ。

その不安は俺たちの間に、常に漠然と存在した。が、それを口にするのは自然と禁忌になっていた。もしそうだとしたら、俺たちが梯子山の迷宮に潜ることに何の意味もなくなるからだ。

そして結局、事態は最悪となった。宝珠が原因を映し出しても、最高の叡智を持つ五賢者にすらそれが何であるか理解できないのでは、異変を止めることなど不可能だからだ。

「――宝の持ち腐れって訳かい」

俺の呟きが沈黙を破った。視線を向ける老エルフに、俺は続けた。

「あんたがたに解らねえものを俺が見当がつくとは思えねえんだが、もしこの場でできるんなら、そいつを宝珠に映してもらえねえか。駄目でもともとのつもりで、俺たちが見ておくのも悪くねえだろう？」

「そうね。この宝珠がどう働くのか見てみたいわ」

ディーが相槌を打つ。「いかがかしら、女王陛下？」

ベイキ女王は、賢者の絶望的な報告にも努めて平静を保っていた。そしてしばらく目を閉じると、静かに五賢者に問いかけた。「できますか？」

その声に、微かな震えがあった。だが、それはもはや少女の怯えた呟

きではなく、破滅の運命にある王国の統治者が、その重圧に必死で耐えながら絞り出した君命だった。
五賢者は頷くと、その場に立ち上がった。身長に劣るノームとホビットの賢者には、上半身が円卓から上に出るだけの踏み台がすぐさま用意される。
彼らは左の人差し指と中指を揃え、女王の前で輝きを放つ宝珠にそれを向けた。そして、俺には理解できない奇妙な韻律の呪文を詠唱し始めた。
不思議な響きが室内を満たしていた。どこかしら気分を高揚させるような、耳慣れない旋律を刻んで唱和は進んでいく。
「多分、超古代の高等呪術言語のひとつよ。発音に特徴があるの」
目は賢者たちに向けたまま、ディーが俺に囁いた。「催眠効果があってね、自分自身の精神集中を高めているみたいだわ」
そう言ううちに、宝珠に変化が現れた。
表面に渦巻いていた色彩が薄れ始めたのだ。銀色の光輝は次第に弱まり、宝珠は大気に溶け込むかのようにその透明度を増していく。
やがて全く光を発さず、反射もしない一瞬が訪れた。
その瞬間、宝珠は消失したかに見えた。完全に透明になったため、向こう側がそのまま目に映っているのだ。
詠唱が止んでいるのに気づいた時には、宝珠はすでに映像を結んでいた。
「これは――」
マイノスが呻いた。
それは、球形の闇がわだかまっているように見えた。
宝珠が映し出しているのは、漆黒の闇だった。冥府の底の如き、あらゆる光を吸い込む暗黒の空間がそこにあった。
――いや。
違う。
俺は目を細めた。宝珠の中の暗闇で、何かが蠢いたような気がしたからだ。
それは不可思議な映像だった。宝珠自体は十センチ程度の直径しかなく、しかも俺から数メートル離れた円卓上に位置している。そこに映し出されているものなど、視界の中ではほんの一点を占めているに過ぎない筈だ。
だが、一度宝珠に視覚を集中させると、周りの光景は全て視界の外に追いやられた。宝珠の中の小さな映像が視界一杯に広がっているのだ。
まるで俺が暗黒の中にいて、直接そこを覗き込んでいるかのような感覚だった。これも宝珠の秘めた魔法の力に違いなかった。
次第に目が暗闇に慣れてきた。そして、俺はそこが全くの闇ではないことに気づいた。
遥か下方から、微かな赤い光が届いていた。その光が、蠢く巨大な何かをぼんやりと照らし上げている。
唐突に、俺はその正体を認識した。
煙だった。
恐ろしく深い縦穴の中を、凄まじいまでの量の黒煙が立ち上っている。その煙の腹が光に照らされ、赤黒くうねっていたのだ。
だが、宝珠が映し出そうとしているのは煙などではなかった。
俺は見た。濃い黒煙が割れたわずかな間に、そこに奇怪な代物が存在しているのを。そしてそれこそが、賢者たちの叡智をも退けているということを知った。
数十メートルの大きさはあろうか。
それは鉱物のようにも、また生物のようにも見えた。
金属の上に、生物的なぬめりのある表皮を薄く被せていると表現すればいいのだろうか。溶けかけたガラスを思わせる外皮を、それは有していた。
全体のフォルムは、球を半分ほどの厚さに押し潰したような印象を受ける。が、球体と呼ぶには表面に余りにも突起が多過ぎた。
無数の太い触手のようなものが、それの全身から突き出していた。そのうちの幾つかは長く伸び、恐らくはこの物体を縦穴の中空に支えている。特に太い数本が、真っ直ぐに下方へ伸びているのも見てとれた。



わかったのは、それだけだった。
限りなく暗闇に近い空間に浮かぶ、生物とも人造物ともつかぬもの。
それが、宝珠の指し示す天変地異の原因だという。
確かにこんな情報では、五賢者が音を上げたのも納得できる。
今目にしている光景はどこで、この物体は何であるのか。そして、何故にこれが天変地異の原因として映し出されるのか。その、異変の回避に必要なことが何ひとつはっきりしないのだ。
太古の時代、宝珠を造りだした者たちは、この程度の情報を示されただけでも全てを読み取ることができたのだろう。神秘の宝珠は問いに対する事実だけを映し、それを分析するにはまた別の神器なり魔法なりが存在したのだ。
今となっては、それらの方法を模索する暇はあるまい。あとは——余りにも虫が良過ぎて恥ずかしくなるが——異変がこのまま鎮静してくれることを祈るしかない。
映像は再び黒煙の暗闇に包まれ、急速に遠ざかっていく。
我に返ると、視界はもとの室内に戻っていた。
ディーとザザ、マイノスとベイキ女王も、今の映像を同じように幻視していたようだった。全員の顔に困惑と驚き、それと恐怖が綯い交ぜになった表情が見てとれた。
ベイキ女王は胸の前で細い腕を交差させ、両肩を抱いて呼吸を整えようとしている。宝珠の見せた光景がよほどショックだったらしい。
それは俺たち冒険者も例外ではなかった。
ディーは親指を立てて拳を握り、それを額に当てて思考を巡らしているポーズをとっていたが、その拳は白くなるほど握り締められて細かく震えている。マイノスは首を振って脳裏から今の映像を振り払おうとし、ザザまでが額に汗を浮かべて両掌を固く組み合わせていた。
宝珠は、初めて目にした時と同様に輝いていた。あの暗闇とは対照的な銀の光に、俺も我知らず安堵の吐息を漏らしていた。
「訂正するわ。見なければ良かった」
ディーが力なく呟いた。「あれはどこ？　地獄の釜かしらね」
「だとしたら我々にはお手上げですね。その原因に近づくことさえできないんですから」
ザザは自嘲気味の嗤いを浮かべた。「どのみち今のものが何であるのかさえ見当がつかないのでは、地獄でもどこでも大差はないですが」
「少なくとも、何に見えた」
俺は尋ねてみた。聞いてどうなるとも思えなかったが、あの異質なものを仲間たちが何と見るのか知りたかったのだ。
「あたしは巣のように見えたわ。もしそうだとしたら、棲んでいるのはきっと胸の悪くなるような生き物でしょうけど」
「巣——ですか。私はむしろ繭に近い印象を受けましたが、そこから孵るものを想像すると巣のほうが救いがありますね」
ザザとディーもあの物体に、どこかしら生命体の匂いを嗅ぎ取っているらしい。しかし俺の知る限り、あんな形態の巣や繭は類がない。
「目の錯覚かも知れんが」
マイノスが俺を見た。今ばかりは、お互いにいつもの啀み合いをする気にはなれない。
「黒煙の揺らめきではなく、あの巨大なもの自体が蠢いたような気がする。まるで、あれが生きているかのように——」
その考えを打ち消すかのようにマイノスは沈黙した。
俺たちの意見は、それでおしまいだった。
賢者たちはすでに着席していた。そのうちのひとり、長い白髭を生やしたノームの賢者が、まだ衝撃の醒めやらぬ様子の女王に気遣わしげな視線を送りながら口を開いた。
「この映像の正体が掴めぬ限り、我らの手で異変を食い止める方策を打ち立てることは不可能です。残された希望は、ここ数週間小康状態にある異常気象が、異変の終局を示すものであってくれれば、ということだったのですが——」
そこでノームはためらい、そして意を決して言葉を継いだ。「良くない兆候が現れております」
全員が老いたノームを注視した。今以上に、悪いニュースが用意され

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

ているらしい。

視線を受け、ノームは続けた。

「これまでの異変の強弱の波と気象状況の記録を合わせて分析したところ、あるパターンを成していることが判明したのです。そこに明け方の地震を当てはめた結果、極めて高い確率で今後の変化が予測できました。即ち――」

自ら語ろうとする言葉に、老ノームは息を詰まらせた。「大破壊が間近に迫っております」

声をあげる者はなかった。訊き直す者も、喚きたてる者も。

大破壊――それは天変地異の中、いつ起こってもおかしくなかった。だが、起こらぬことを願う余り、俺たちはその事態を除外して考え続けてきた。

かつて文明の多くを壊滅させた悪魔王マイルフィックの暴風雨に匹敵するか、それ以上の破壊をもたらすであろう大変動。それがついにリルガミンに襲いかかろうとしているのだ。

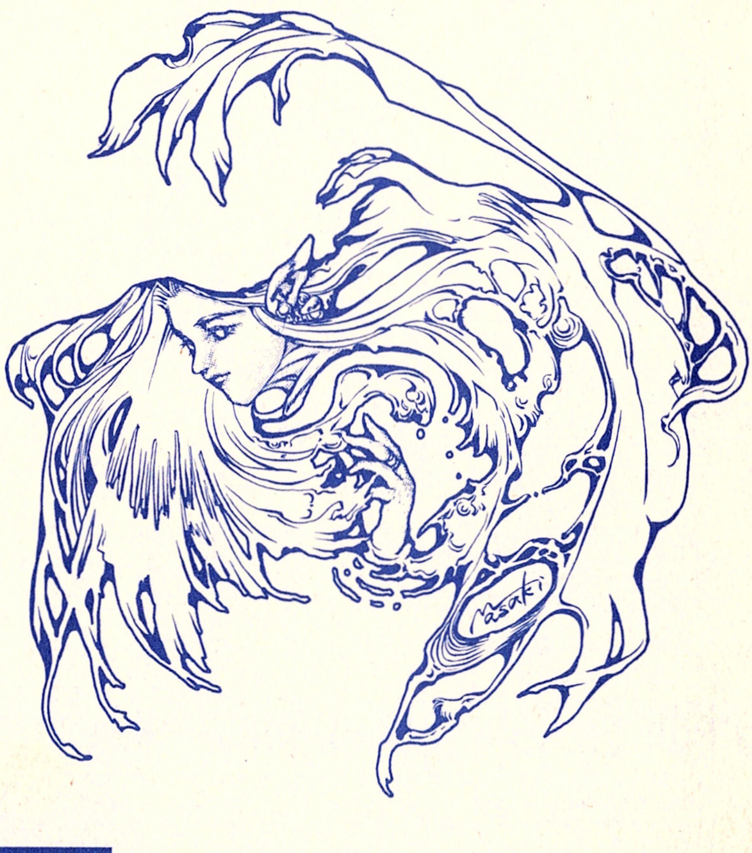
老エルフの悲しげな表情は、単に異変の原因が理解できぬからではなかった。

大破壊による大多数の民の死――いや、津波に呑まれたアルビシア諸島のように、生き残る者さえいないかも知れぬ。その生命の消滅に、エルフは深い悲しみを見ていたのだ。

逃げ場はないだろう。俺も死の顎に捕らえられる。

そう思いながら、俺はある決意を固めていた。

（次号につづく）



あとがき

今年から、大学に復学している。

何を今更、という声も少なくはないが、学校というところはやめてしまうと急に敷居が高くなるので、ちょっと友達に会いに、とはいかなくなってしまう。人間関係が狭くなるのは、こりゃいただけない。

それに、ま、あと二年（最短でね）は勉強してやろうじゃないか、とも意気込んでいる訳です。

しかし同学年だった連中はほとんどこの春に卒業してしまったので、ここはいざという時蜘蛛の糸を垂らしてくれる友達をたくさんつくらねば、と語学の時間馴れ馴れしく話しかけるのだが、返ってくる言葉はみーんな『ですます』調の敬語だったりする。年上に見えてしまうのだろうかね、やっぱり。あー歳なんかとりたかねー。

僕ですらこのありさまなんだから、うちのスタジオベントスタッフ社長・山下章はどうなるのか？　今年も8年生として大学通ってるからねえ。

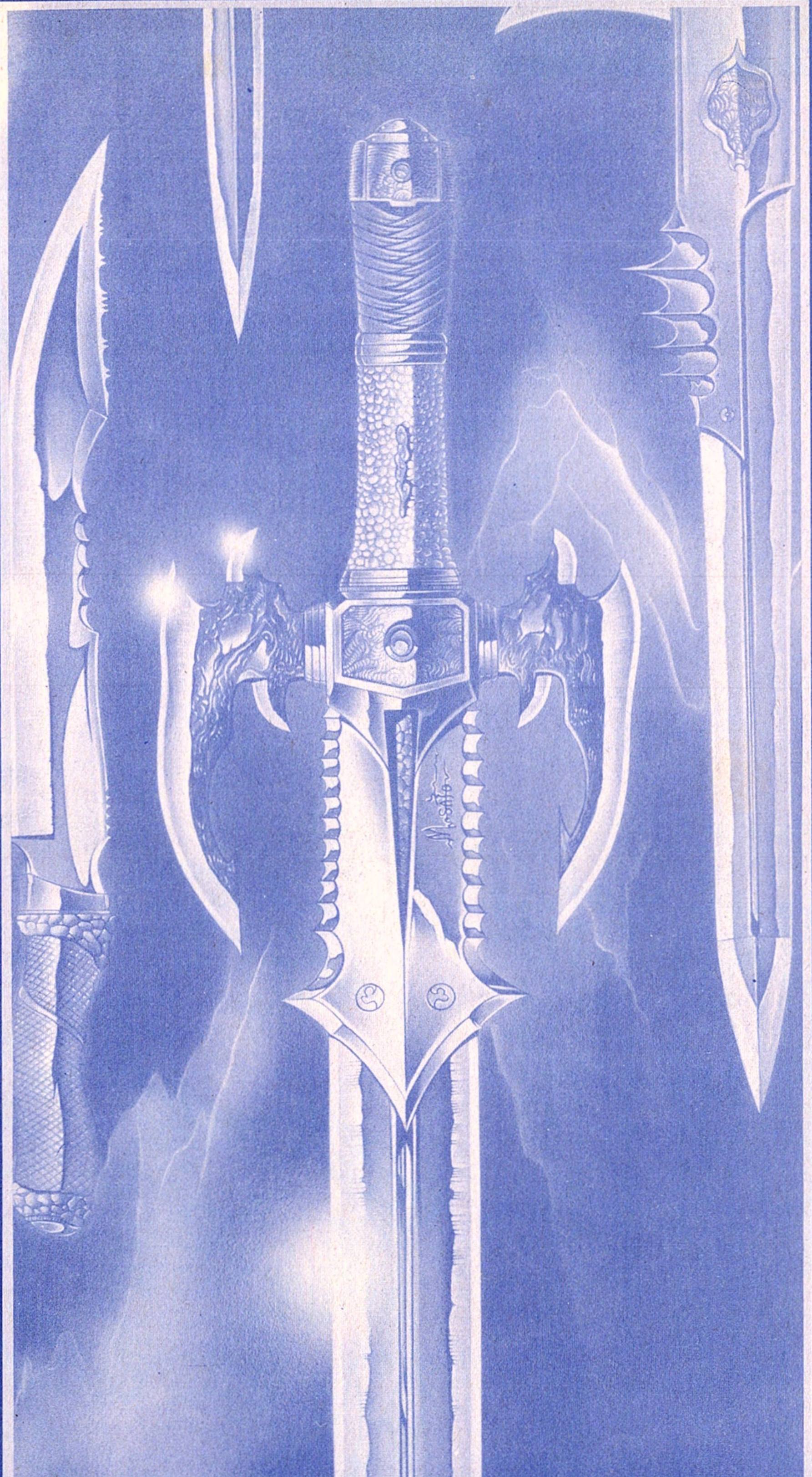
そう言えば銀河鉄道999のメーテルのような気分だと言ってたっけ(笑)。

特報!!

小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著

6月上旬単行本化決定!! 予約受付中!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆! 新たなウィズ世界に御期待ください!



▶ファンタジーランドは
(P104)からお読み下さい。